

四 鎌倉時代の形勢

鎌倉幕府が開かれて武家による権力支配の時代に入るが、九州では太宰府におかれた鎮西探題が、肥前、筑前、豊前、杵岐・対馬の守護も兼ねるようになった。

肥前で地頭になったのは、佐嘉郡龍造寺村に、文治元年（一一八五）藤原季家が入って地頭になり、高木宗家が国分寺の地頭になったものなどがある。又、小城郡晴氣荘の千葉氏など他国から肥前に入った武士も多い。

鎌倉幕府による政治体制も、時の経過とともに次第にくずれはじめ、各地に群雄割拠の兆候があらわれて、地方武士の新たな興隆が出てくる。

ことに蒙古襲来による文永の役、弘安の役には、西国九州の御家人の戦闘参加による活躍があった。

文永五年（一二六八）以来数度に涉って、蒙古の国書が太宰府に送られて、威圧的な通告が強要されたが、幕府はこれに対して答えず、沿岸警備に当たった。文永十一年（一二七四）元と国号を定めた蒙古は、二万五千の兵、九百隻の艦船が杵岐、対馬を経て、松浦沿岸を襲った。わが軍は苦戦をつづけたが、一夜の嵐に艦船の多くが沈没して逃げ帰った。その後、博多、松浦方面の沿岸警備は、一段と厳しくなり、防塁の構築も大規模に行われた。弘安四年（一二八二）大軍を擁して、渡来した蒙古軍との間に、志賀島、杵岐等、各地で激戦がつづけられ

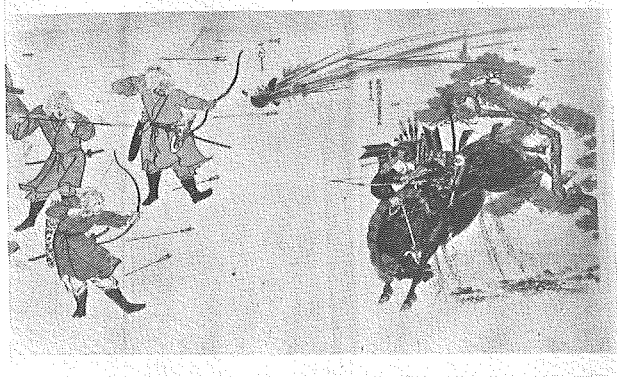
たが、再び、暴風雨に遭った蒙古の船団は全滅を喫した。この両役に、松浦党はじめ肥前の武士の多くが、沿岸警固に当たり、戦に加わった。大宰少貳、大友、菊池らとともに、高木、龍造寺等の名があり、おそらく川副郷の武士たちも、分担された警固役に当たり、戦闘に参加したものと思われる。

戦後、幕府は戦功のあったものに対して、論功行賞を行い、その功に応じて、所領や役職を与えた。肥前国内でも、多くの所領地が恩賞としてあげられたが、たとえば「龍造寺文書」の「弘安四年蒙古合戦勲功賞肥前国米多統命院配分事」の中に「河副木原内、一所六段……」などとある。これは、河副北荘、現在の北川副町木原の地に当たる。

五 南北朝時代

元寇はさいわいに撃退されたが、未曾有の国難であったため、鎌倉幕府にとっても致命的な傷手となった。やがて、皇位継承問題に干渉した執権北条氏を倒すために、後醍醐天皇の討幕運動が起こった。

九州においては、少貳、大友両氏が諸国の軍勢とともに、鎮西探題を攻めてこれを亡した。この時、龍造寺氏も論旨を奉じて、郡内



蒙古来襲絵図（「元寇の研究」所載）